専修大学自己点検・評価に関する
外部評価報告書

2023（令和 5）年度

2024（令和 6）年 3 月 14 日

専修大学自己点検・評価に関する
外部評価委員会

目　　次

１．自己点検・評価報告書に対するご意見・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１
（１）評価できる点について
（２）改善を要する点について

２．委員長総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　８

自己点検・評価に関する外部評価委員会（2023（令和 5）年度）活動経過

委員一覧

１．　自己点検・評価報告書に対するご意見

（１）評価できる点

〔1〕経済学部	３学科をもって学部を構成することで経済学全般を網羅した形になっている。 公開講座、シンポジウムの開催は大学の知性を広く世に広めるものであり、より一層の継続性と発展が望まれます。（後藤委員）
	現段階では、良いと考えます。（富樫委員）
	＜教育課程の再構築について＞評価の視点②中オンラインによる公開講座については、コロナ禍における感染防止にも配慮した適切な開催手法であったとともに、多くの参加につなげるなど、選定したテーマについても適格であった。（前田委員）
〔2〕法学部	大学として学生に何を学ばせるのか、学んで欲しいのかが明快になっております。 初年度から学位取得まで、学生の視点も加えた制度設計とその提示がなされていること。（後藤委員）
	新たな「教育課程編成・実施の方針」の作成を中核とした、ポリシー間の連関性の確保、対面授業とオンライン授業の配置の検討、授業評価アンケートの工夫などの様々な改善に、精力的に取り組んでいる印象を受けました。（坂本委員）
	調書・特色,問題点が分かりやすく記載されている（富樫委員）
	＜教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか＞評価の視点①中カリキュラム・マップの作成等については、必修科目、選択科目が計画的に体系づけられているとともに、「法学部学修ガイドブック」での公表、「法学部フォーラム」の公刊等により、学生等に対して分かりやすく解説していることは評価できる。（前田委員）
〔3〕経営学部	教育課程の体系、内容が明示されており、学年ごとの履修計画が整備されている。（後藤委員）
	専門科目の六つの細分化項目に従ってのステップアップ、ビジネス研究科目の展開増による充実といった教育課程編成上の努力がなされ、更に講義要項の第三者チェック、経営学部卒業生アンケートの実施、学習成果のフィードバックの工夫、GPS-Academic を含め科目ナンバリングやカリキュラムマップの開発の検討など、学生による履修上で必要な施策の充実に向けた努力がなされているとの印象をもちました。（坂本委員）
	現段階では、良いと考えます。（富樫委員）
	＜教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか＞評価の視点③中体系的な教育課程について、４つの科目群及び専門科目の６つの細分化項目に基づき個々の授業内容が計画され、カリキュラム・ポリシーとの関連性の明確化が図られていること

	は、学部生の総合的な資質の向上、能力の修得につながっていくものと考えられ、評価できる。（前田委員）
〔4〕商学部	優秀学生の学部長表彰は大変宜しいことと思います。より実学レベルでの表彰を継続的にお進め下さい。（後藤委員）
	現段階では、良いと考えます。（富樫委員）
	＜学位授与方針に明示した学生の学習効果を適切に把握及び評価しているか＞評価の視点①について、７段階に細分化された成績評価や授業科目ごとの成績評価へのグレード・ポイントの付与など、学習効果が適切かつ総合的に行われていることは評価できる。（前田委員）
〔5〕文学部	「多文化共生社会」への言及は素晴らしいと思います。 大学からの視点（視線）と学生からの視点の双方を意識していることが good point です。 特徴ある学科を持つ学部ですので是非社会貢献度の高い人財育成を強化して頂きたい。（後藤委員）
	日本文学文化学科における、教育課程編成・実施方針の修正案の作成、三パターンの履修モデルの作成、ゼミの定員を減らしてきめ細かな授業環境の提供、英語英米文学科における、カリキュラム改訂による英語運用能力の習得を目指した科目変更、英語アセスメントテストの縦断的実施、哲学科における専門教育課程での順次性と体系性への配慮、歴史学科における、入門ゼミについての学科全体での教育内容の検討と共有、ルーブリックの考え方を取り入れた評価方法の導入、環境地理学科における、フィールドワークを含む必修科目の設置、「卒業論文の評価の観点」の作成、ジャーナリズム学科における、カリキュラム改正に向けた四つの科目群の教育課程や卒業論文製作発表会の実施方法の検討。（坂本委員）
	現段階では、良いと考えます。（富樫委員）
	日本文学文化学科＜学位授与方針に明示した学生の学習効果を適切に把握及び評価しているか＞評価の視点①について、授業時のコメントシートや各学期末におけるレポートの実施、授業評価アンケート等による当該学科の特性に応じた学修成果の測定など、これらの諸評価が適切に行われていることは、学習ニーズに合った授業の展開や学科全体の質の向上につながるものと考えられ、評価できる。（前田委員）
〔6〕ネットワーク情報学部	学習ポートフォリオは学生の自主性を重んじた良い取組と思います。 教育目的に即した教員構成の設定は素晴らしいと思います。（後藤委員）
	新 DP、CP の改訂と、それに対応したカリキュラムマップの統一的な指針の整備、カリキュラムの縦横関係の整合性の各プログラムごとの点検、学習ポートフォリオ導入と工夫など、諸課題に精力的に取り組んでいる印象を受けました。（坂本委員）
	非常にいいです！（富樫委員）

〔6〕ネットワーク情報学部	＜授与する学位ごとに、教育課程の編成・実施方針を定め、公表しているか＞評価の視点②について、これらが学部の公式サイトに公表され、また、学部Web（ローカルコミュニティ）にも確認しやすく掲載されているなど、複数の方法により明示されていることは、当該学部・学科の運営方針の明確化につながっていくものと考えられ、評価できる。（前田委員）
〔7〕人間科学部	現状は適切に分析されておられ評価項目と合致しています。（後藤委員）
	現段階では、良いと考えます。（富樫委員）
	心理学科＜学位授与方針に明示した学生の学習効果を適切に把握及び評価しているか＞評価の視点②中、学生全員に課される卒業論文について、提出前の卒論ガイダンスの実施による指導や、客観性の確保のための副査としての査読の取組は、学習効果の適切な評価に資するものであり、評価できる。（前田委員）
〔8〕国際コミュニケーション学部	あるべき姿と方向性を長所・特色の中で明示されておられるのは良い事と思います。（その次は実効性の測定ですが）（後藤委員）
	日本語学科における、「日本語応用実習」の設置、日本語運用のプロから学ぶ協力講座の複数開設と特色ある実施、異文化コミュニケーション学科における、少人数クラスでの指導、および両学科における「学生出席状況調査」の実施と活用。（坂本委員）
	現段階では、良いと考えます。（富樫委員）
	＜学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか＞評価の視点②について、学生の学習効果の向上に向けて、日本語運用のプロフェッショナルからの直接的な指導を受けることができる機会が設けられているなど、学習の取組が適切かつ総合的に行われていることは評価できる。（前田委員）
〔21〕入学試験関係	多様な試験制度の導入を更に充実して頂きたい。（後藤委員）
	入試をめぐる諸情勢や諸環境の変化に、機敏で適切な対応がなされているとの印象です。（坂本委員）
	内容的には問題ないと思います。（富樫委員）
	＜学生募集強化について＞評価の視点①について、新型コロナウイルス感染症の感染防止に向けた対応が求められる中、オープンキャンパス等が適切に実施され、参加者の満足度が高く得られていることは評価できる。（前田委員）
〔9〕経済学研究科	現行カリキュラムポリシーの問題点と、その改善に向けての細かな検討、学習成果測定上の諸課題と改善に向けての試行錯誤を反映した記述となっている印象を受けます。（坂本委員）
〔11〕文学研究科	専攻ごとの学習成果の評価の方法や指標の導入について、適切な配慮がなされているように思います。（坂本委員）

〔12〕経営学研究科	教育課程の編成・実施方針への「教授法」の明記、授与する学位ごとのポリシーの区別、入試科目の見直し、受験のための課題図書の選定、教育活動の動画の作成、終了時アンケートの実施など、きめ細かな課題の発見とそれらの改善がなされている印象です。（坂本委員）
〔13〕商学研究科	学習成果の適切な把握のための、分野別発表会、中間発表会、研究報告書の提出など、積極的な取り組みがなされている印象です。（坂本委員）
〔15〕全学カリキュラム関係	教育課程編成・実施の方針と、カリキュラムマップの整合性について、共通観点第二階層、第三階層の割合を算出しての、的確な確認がなされている印象です。（坂本委員）
〔17〕資格課程	同一名称科目のシラバス内容の統一、教員採用試験対策講義の実施、学芸員課程での館務実習館への訪問と討議など、地道な努力がなされている印象をもちます。（坂本委員）
〔18〕図書館	目録情報の体系化と連携、学術コンテンツの活用のためのサービスの整備、学術情報へのアクセス支援、情報検索講習会や専修大学図書館チャンネルによる利用促進など、様々な分野での進歩に合わせた、適切な対応がなされている印象です。（坂本委員）
〔19〕研究所	新型コロナ禍の下で、各研究所が活動の継続性を保ってきた努力が、よくわかる記述となっている印象です。（坂本委員）
〔20〕情報科学センター関係	学生のほぼ全員がノートパソコンを保有する状況の変更や、「数理・データサイエンス・AI 教育のスタートに合わせた、Si データサイエンス教育プログラムの導入のための設置委員会の立ち上げなど、的確な施策が採られている印象です。（坂本委員）
〔22〕学生生活関係	障がい学生の支援、心理的成長に関する課題をかかえる学生の支援、大学生活にうまく適応できない学生への対応等について、きめ細かで適切な配慮がなされている印象を受けます。（坂本委員）
〔24〕就職指導関係	「卒業後の進路のイメージ調査」、「卒業生の就職先からの意見聴取アンケート」の実施、WEB 相談（予約制）の導入などに、学生の就職支援に有効な配慮がなされているのを感じます。（坂本委員）
〔26〕キャリアデザイン関係	ルーブリック評価の能力指標を「キャリアデザイン基礎力」と名称変更して、利用マニュアルの作成をなすとともに、年間授業終了後の達成度の検証を行う試み、「ワーキングライフ１・２」のキャリア教育科目領域への移設、「専修大学入門ゼミナール」での出張講座の実施、就業体験型インターンシップの正規科目化など、精力的な取り組みがなされているのを感じます。（坂本委員）
〔27〕社会知性開発研究関係	ソーシャルウエルビーイング研究拠点、中小企業 SDGs 研究拠点、四川・ローカルリスクコミュニケーション研究拠点、複式簿記普及事業推進研究拠点が、着実な活動を進めている印象を受けます。（坂本委員）

〔29〕数理・ﾃﾞｰﾀｻｲｴﾝｽ・AI 教育関係	オンデマンド教材の作成、学長と運営委員会委員長との対談動画の作成などを通じて、学生や新入生の興味と関心を喚起する取り組みが、着実になされている印象です。（坂本委員）

（２）改善を要する点

〔1〕経済学部	各項目においての長所・特色の記述が少なすぎます。特に社会的意義や他大学との違いについての長所の認識があって良いと思われます。 成績不振者へのフォローは素晴らしいのですが、成績優秀者へのフォローもあって良いのではないでしょうか。 「有名教授」の招聘を含めた教員のレベル向上策が必要と思われます。（特に金融論などの産業界に近い分野）（後藤委員）
	教育課程の編成、学修の順次制・体系性、初年次教育等々の課題に、適切に対応しているとの学部の教育方針に基づく評価だけが記されているのは、読む者にとっては常に改善を心がけているという姿勢が見えにくく、記述の仕方としては、改善には欠かせない【問題点】を挙げている「進学準備シート」「学修プロセス自己点検シート」の評価の方が良いのではないかとの印象をもちました。（坂本委員）
	訴求手段として SNS の検討も必要ではないかと考えます（富樫委員）
	＜教育課程の再構築について＞評価の視点③について、諸事情により、経済学部教務委員会規程の作成に替えて経済学部教務委員会に関する内規を制定されたとのことであるが、実務の推進にあたっては、当初の目的に齟齬が生じないよう適切に運用されたい。（前田委員）
〔2〕法学部	各種委員会、協議会に依存する部分が多い様に読み取れます。学部内の検討、自浄作用の提起があれば尚宜しいかと存じます。（後藤委員）
	一読しましたが、特にありません（富樫委員）
	＜学位授与方針に明示した学生の学習効果を測定するための指標の設定の状況＞評価の視点②中「授業評価アンケート」については、今後も継続した取組を進め、教員と学生との意思の疎通を十分に図ることにより、充実した学部運営、学修成果の向上等につなげていただきたい。（前田委員）
〔3〕経営学部	社会科学領域の経営学部ならではの実践と理論への収斂という観点を重視したカリキュラムを重視して頂きたい。 教育課程の体系や科目配置に関して、そもそもの目的が明確になっていない様に感じます。 長所・特色の記述が皆無なのは何故でしょうか。 実践的な学部であるが故に実業他で実績のある看板教授の招聘を望みます。（後藤委員）
〔3〕経営学部	特にありません。（富樫委員）
	＜学位授与方針に明示した学生の学習効果を適切に把握および評価しているか＞評価の視点①について、各授業科目及び各担当教員作成のシラバスのクロスチ

	ェックが行われているが、今後も継続した取組を進めるとともに、一定の課題が得られた場合には、学部内共有を図りながら、その改善に向けた対応に取り組まれたい。（前田委員）
〔4〕商学部	実学の実践、教育課程の配慮ほかの項目の評価内容で「適切」という表現の妥当性が不明です。 専修大学商学部ならではの教育体系や個別の科目、そして如何に実践的な教育を行って行くかの視点が必要だと感じます。 長所、短所の記述が皆無なのは何故でしょうか。（後藤委員）
	商学部が採用している各方針は適切であるとの自己評価は、一応理解できたのですが、その実施により気付いてきた【長所・特色】、【問題点】についての記述が全くないのは、自己点検・評価に期待されている趣旨（自己点検してみた結果としての具体的評価の公表の趣旨）に鑑みて、若干物足りなさを覚えます。（坂本委員）
	特にありません。（富樫委員）
	＜学位授与方針に明示した学生の学習効果を適切に把握及び評価しているか＞評価の視点①について、特に優れた成果を上げた学生への学部長表象が実施されているところであるが、引き続き、対象世代のモチベーションの向上や学習・研究意欲の高揚につながる取組を進めていただきたい。（前田委員）
〔5〕文学部	授業項目、教育課程の体系的編成に関して、全ての評価視点がオンライン関連であるのは如何かと思います。（日本文学文化学科） 全般的に「評価の視点」に関しての現状説明に具体性が少なく長所、特徴の記述も少ない。（後藤委員）
	訴求手段として SNS の検討も必要ではないかと考えます（富樫委員）
	左欄「評価できる点」に関連して、レポートやアンケート等には表れづらい学生の心理や特性の更なる把握に努めながら、より質の高い授業の展開はもとより教育機関としての人材育成を進めていただきたい。（前田委員）
〔6〕ネットワーク情報学部	左記 2 点の全学展開は如何なっているでしょうか。（後藤委員）
	他学部のアンケート支援などをされては？ 的外れですかね。（富樫委員）
	＜教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか＞評価の視点②について、学生目線での理解促進に向けて、入学者用の学修ガイドブックの修正がなされたところであるが、引き続き、継続的な取組を進めることにより、更なる整合性の確保を推進していただきたい。（前田委員）
〔7〕人間科学部	人間科学部ならではのカリキュラムや講義実践の方式まで記述が為されておりますので、その長所、特徴を出来れば他の大学とも比較しながら設計されていかれては如何かと思います。（後藤委員）

	人間科学部ホームページを根拠資料とする、学部の方針とその公表の説明は良く理解できたのですが、それの実施により見出されるはずの具体的評価である【長所・特色】、【問題点】の記述が少なく、自ら課題を見つけてその解決を検討するという姿勢（卒業論文の指導と評価に関する記述にあるような姿勢）のアピールが弱い印象です。（坂本委員）
	特にありません。（富樫委員）
	社会学科＜学位授与方針に明示した学生の学習効果を適切に把握及び評価しているか＞評価の視点③について、学習成果を把握及び評価するための方法の開発は行っていないとあるが、引き続き、他学部の動向や他大学の取組等を注視していただき、必要となる取組を進めていただきたい。（前田委員）
〔8〕国際コミュニケーション学部	将来本学の看板学部として全学を牽引する様な気概を込めた実践、実学の実施をお願いしたい。（後藤委員）
	特にありません。（富樫委員）
	＜学位授与方針に明示した学生の学習効果を適切に把握及び評価しているか＞評価の視点③について、各学生の出席状況や課題等の提出状況等の把握がなされていることにより、困難を感じている学生の早期発見、早期対応につながっていると考えられるので、引き続き、継続した取組を進めていただきたい。（前田委員）
〔21〕入学試験関係	リスティング広告やエリアメールを活用してのオープンキャンパス集客成功事例があります。（富樫委員）
	＜入学者選抜試験実施体制について＞評価の視点①について、一般選抜における試験監督業務の見直しがなされたところであるが、これらの見直しにあたっては、試験の適正な実施が損なわれることのないよう留意願いたい。（前田委員）

２．委員長総括

本学では、教育研究活動の改善および向上を図ることを目的として、定期的に自己点検・評価を実施しておりますが、自己点検・評価の客観性及び公平性を担保するとともに、教育研究水準を更に高めていくためには、外部からの評価や意見を取り入れることが重要と考え、「専修大学自己点検・評価に関する外部評価委員会（以下、「外部評価委員会」という。）」を設置し、毎年度『専修大学自己点検・評価に関する外部評価報告書（以下、「『外部評価報告書』」という。）』を作成しています。外部評価委員会の委員（以下、「外部評価委員」という。）には、本学が所在する地方自治体の方、企業等に所属されている方、本学名誉教授の方にご参画いただき、第三者の立場から、貴重なご意見やご助言を頂戴いたしました。まずは、この場を借りまして深く感謝申し上げます。

本学は、2020（令和 2）年度に創立 140 周年を迎え、変化の多い社会の中で、大学創立時の建学の精神である「社会に対する報恩奉仕」と、その建学の精神を現代的に捉え直した２１世紀ビジョン「社会知性（Socio-Intelligence）の開発」を実現するため、本学では自らの教育研究や組織運営等の状況について継続的に点検・評価し、質の保証を行うとともに、絶えず改善・向上に取り組むことを期して内部質保証システムの構築にまい進しているところです。また、本学は、学生や保護者の皆様をはじめ、本学を様々にご支援いただいている学内外の方々に対して、本学における教育研究の質保証の責任が、第一義的に大学自身にあるという考えに基づき、各教育課程運営組織における学問の自由と誠実性（インテグリティ）を尊重しつつも社会の要請に応えるべく、不断の努力に取り組んでおります。

とりわけ学生に対して学位を授与する各教育課程運営機関の学位プログラムにおける教育課程の編成・実施においては、学内における「自己点検・評価活動」と、法令に拠り定められた「認証評価」のみならず、外部評価委員会による「外部評価」の結果を踏まえて、本学が掲げる三つの方針（ディプロマ・カリキュラム・アドミッションの各ポリシー）を踏まえた取り組みが有効に機能しているかどうかを検証することをもって内部質保証システムとしています。

本項では、2023（令和 5）年 8 月 2 日～9 月 20 日にかけて外部評価委員に行っていただいた外部評価の結果を基点としつつ、10 月にもたらされた本学の IR（※）データの結果と活用の方向性にも触れ、本学の自己点検・評価に対する『外部評価報告書』の委員長総括としたいと思います。

※「Institutional Research」の略。学内に蓄積されている多数のデータを集積、分析し、そこから導き出される結果から、学内での意志決定や改善活動を立案・実行・検証するための支援を行う活動を指す。
本項においては、本学教務部に置かれた IR を専門とする職員が行った、学生の学修時間や教育の成果等に関する情報の収集・分析結果を中心に取扱う。

さて、『外部評価報告書』は、「１．自己点検・評価報告書に対する所見および評価」および本項の 2 部構成としており、さらに、「１．自己点検・評価報告書に対する所見および評価」は、「評価できる点」と「改善を要する点」の 2 区分に細分化して所見および評価を取りまとめました。

2023（令和 5）年度の外部評価の結果を概観してみますと、概ね以下の諸点が明確になってまいりました。

まず、「評価できる点」として、以下の諸点について指摘をいただきました。

「学部の教育課程の編成・実施方針に基づき、学位課程にふさわしい授業科目を開設して、教育課程を体系的に編成しているか」については、すべての学部で概ね満足できる水準にあるとの評価をいただきました。個別の学部の教育内容に対応した独自の施策について、各学部別に高評価をいただいた内容は以下のとおりです。

経済学部における公開講座やシンポジウムの独自開催していること、法学部における授業評価アンケートの工夫していること、経営学部における講義要項の第三者チェックや卒業生アンケート等を実施していること、商学部では実学レベルでの表彰制度を実施していること、文学部各学科での教育活動には創意工夫が多く見られること、ネットワーク情報学部では、学習ポートフォリオを実行していること、人間科学部では、卒業論文作成に向けて教員による手厚い指導方法が採られていること、そして国際コミュニケーション学部では、日本語運用のプロフェッションルからの直接指導が行われていることや少人数指導の徹底されていることが特に高評価を受けました。現在、2026（令和 8）年度から実施する全学部一斉のカリキュラム改正に向けた検討が進行しております。今回の外部評価で指摘された事項は、次期カリキュラムのなかでも活かされるようにしたいと考えております。また、学部教育での学修成果を検証する手段のひとつとして、現在 GPS-Academic を利用しておりますが、学生による回答を WEB 形式にして以来、年次が上がるにつれて、その回答率が極端に減少するという問題を抱えております。その原因として、3・4 年次学生にとって、回答のメリットが相対的に低下しているのではないかと考えられております。大学間比較を意識して、汎用的な質問内容によって構成されている GPS-Academic から得られるフィードバック情報に学生が無関心となっている可能性もあります。4 年間を通じた学生の成長の過程を検証するという観点からも、上級年次の回答数の減少は、分析結果の信頼性に影響を及ぼしかねません。そこで、本学はこの問題への対応策として、GPS-Academic に代わる新たな調査方法の導入を視野に、設問内容を本学学生にフィットしたものとなるような検討を行っております。

入学試験制度に関しては、オープンキャンパスの積極的開催や入試環境の変化への機敏な対応について高評価をいただきました。コロナ禍で制限を設けたオープンキャンパスの開催が、今年度から本格的に対面を中心に開催可能となりました。オープンキャンパスへの参加者は、志願に結びつく割合が高いというデータもあることから、今後とも参加者目線に立って、内容の充実に努めたいと思います。

大学院研究科では、すべての研究科で志願者の増加を図るという問題に直面しております。特に研究分野をめぐる入学志願者と指導教員とのミスマッチをなくすための取り組みを重視する観点から、経営学研究科における教授法、入学者選抜に向けた「課題図書」の選定、修了時アンケート実施など、教育改善に向けた努力が高評価をいただきましたことは、他の研究科にとっても参考となると考えております。

情報科学センターや数理・データサイエンス・AI 教育関係では、「Si データサイエンス教育プログラム」の運営体制について高評価をいただきました。デジタル社会で活躍する人材を育成する際に、人文・社会科学系の本学にとって、当該分野の教育の充実は、文理横断教育という観点でも極めて重要と考えております。本学の「Si データサイエンス教育プログラム」は、文科省「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム認定制度」にも対応するもので、2024（令和 6）年度中にその「応用基礎レベル」を全学部で認定されるように準備いたします。

学生生活面では、特に障がい学生支援でのきめ細かい配慮について、就職指導面では、「卒業生の就職先からの意見聴取アンケート」の実施やキャリアデザイン関係のプログラムの授業科目化・単位化の取り組みについて、高評価をいただきました。特に、「改正障害者差別解消法」の施行により、2024（令和 6）年 4 月 1 日から私立学校や企業等の事業者にも、合理的配慮が法的義務となります。今後とも「障がい学生支援室」と連携しながら、学生の目線に立った対応を心がけたいと思います。

他方、改善を要する項目については、全ての学部に対して指摘を受けました。次年度に向けて、それらの問題を共有し、各学部での対応を支援したいと思います。まず、経済学部に対しては、他学部にない「進学準備ノート」・「学習プロセス自己点検ノート」の点検評価について、より積極的・具体的に発

信すべきであるとの指摘がありました。また経営学部や商学部での教育に対しては、学問の性格上、より実践的な要素をより多く取り入れるべきであると指摘されました。同時に、発信力のある教員の採用を進めるべきとの指摘もありました（経済学部・経営学部）。一方、自己点検内容の記述が具体性に欠ける部分があるので改善を望むとの指摘もありました。人間科学部に対しては、カリキュラムの特徴や学習成果の把握方法等について、競合他大学も意識しながら積極的にアピールする必要があるとの指摘を受けました。国際コミュニケーション学部には、本学の看板学部となるとの気概を持って、より実践的な教育を追求すべきとの指摘がありました。

入学試験関係での改善点としては、オープンキャンパスに向けた集客に係る広報活動（リスティング広告・エリアメールの活用など）を強化するべきとの指摘がございました。本学のオープンキャンパスに参加した高校生は、入学試験に出願する確率が相対的に高いという調査結果もありますので、その広報活動には、一層工夫を重ねたいと思います。

最後になりますが、本学では、『外部評価報告書』に記載された各種の提言を真摯に受け止め、改善・向上に向けた取り組みを進めてまいります。

以　上

自己点検・評価に関する外部評価委員会（2023（令和 5）年度）活動経過

日　程	内　容
2023 年 8 月 24 日	○評価資料の送付 委員に対し、以下に示した資料一式を事務局より送付 ①【評価資料】第 14 期（2021・2022 年度）自己点検・評価報告書 ②【参考資料】入学ガイド 2024 ③【参考資料】全学および各学部・学科の三つの方針
2023 年 8 月 24 日 ～2023 年 9 月 29 日	○委員による評価期間 委員は、『【評価資料】第 14 期（2021・2022 年度）自己点検・評価報告書』の内容に基づき評価を行い、その結果を「外部評価確認シート（回答書）」に取り纏め、事務局へ送付
2023 年 10 月 16 日	○「外部報告書（原案）」の提示 「外部評価確認シート（回答書）」の内容に基づき事務局において「外部評価報告書（原案）」を作成し、委員へ提示
2023 年 10 月 16 日 ～2023 年 10 月 31 日	○委員による「外部評価報告書（原案）」の確認期間 委員は、「外部評価報告書（原案）」の内容を確認し、確認結果を事務局へ報告
2024 年 1 月 23 日	○「外部評価報告書（案）」の提示 「外部評価報告書（原案）」の確認結果等に基づき事務局において「外部評価報告書（案）」を作成し、委員へ提示
2024 年 1 月 23 日 ～2024 年 2 月 29 日	○委員による「外部評価報告書（案）」の確認期間
2024 年 2 月 29 日	○「外部評価報告書」の完成
2024 年 3 月 14 日 15 時 30 分～16 時 30 分	○「令和 5 年度自己点検・評価に関する外部評価委員会」開催 完成した「外部評価報告書」に基づき、委員より学長（外部評価委員会委員長）へ報告。併せて、学長より委員に「委員長総括」の内容を紹介し、意見交換を実施
2024 年 4 月	○「外部評価報告書」の学内各会議報告 ○「外部評価報告書」の大学ｗｅｂサイト公表

専修大学自己点検・評価に関する外部評価委員会委員一覧

（敬称略）

区分	委員氏名
【第 3 条第 1 号】 委員長	委員長 佐々木 重人　専修大学長（※1）
【第 5 条第 1 号関係】 専修大学名誉教授の称号を授与された者	坂本 武憲　専修大学名誉教授（※1）
【第 5 条第 2 号関係】 本学の所在する地域の地方自治体、企業等に所属する者	前田　明信　多摩区・３大学連携協議会座長（川崎市多摩区副区長）（※1）
	富樫　和弘　神奈川県情報サービス産業協会　常務理事 株式会社情創　代表取締役社長（※1）
【第 5 条第 3 号関係】	後藤　康夫　専修大学育友会相談役（※1）

※1：任期　委嘱日から令和 6 年 3 月 31 日まで

以　上